

女子医専資料 県大に寄贈

元教授保管 学則・見取り図など

終戦前後の2年間のみ存在した県立女子医学専門学校（女子医専）の教授、下司孝磨さん（1914～2011年）の遺族が16日、同校の学則などを高知県立大学に寄贈した。女子医専の資料の多くは戦災で焼失しており、県立大側は「戦後の大学史において貴重な資料」としている。

女子医専は、男性医師が戦地に取られたため、女性医師を育成しようと国策で設立された学校。高知市北与力町（現永国寺町）にあった県立工業学校の校舎を使う予定だったが、1945年6月の空襲で焼失したため、佐川町の青年学校を

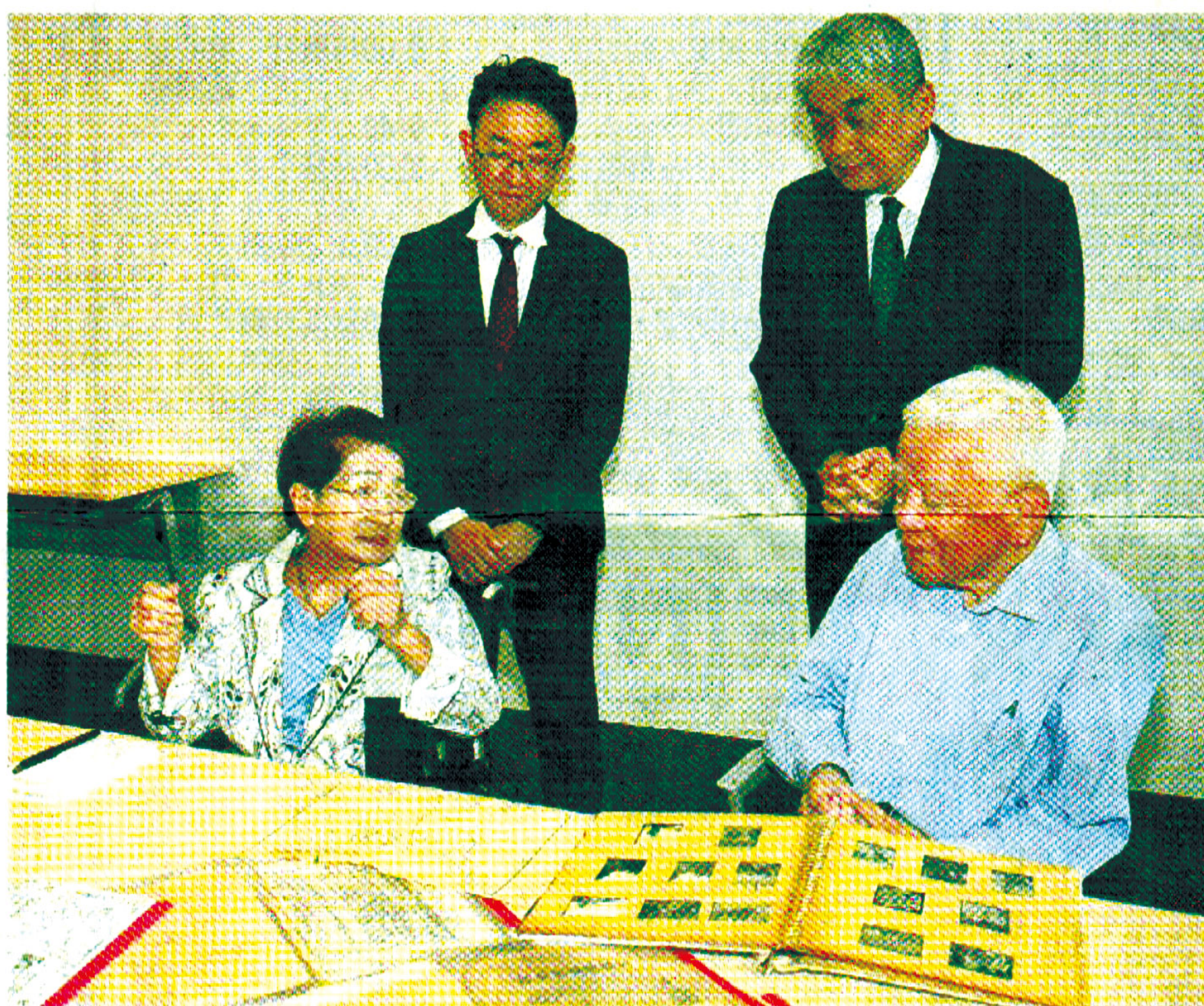
仮校舎として8月8日に1期生約100人で開校した。1週間後に敗戦を迎えた。

生徒たちは開校2年目から高知市の校舎で学ぶようになった。ただ46年12月に南海地震が発生し、財政難により2年で廃校となった。

ここから女性の高等教育を目的とした女子専門学校に変わり、49年に県立高知女子大、2011年の男女共学化で県立大となった。

下司さんの専門は生理学。32歳で赴任し、人材不足で総務的な仕事もしていたという。

この日、長男の孝之さん（81）が、父が保管していた校舎の見取り図や成績考課



規定、時間割、南海地震時の防疫活動の記録など約300点を寄贈した。女子医専1期生で、県立大名誉教授の松崎淳子さん（99）も同席。

「下司先生ら進歩的な教授に支えられて今がある」と語った。

五百蔵高浩副学長は「医専は国策でできたが、当時

「父は高知が本土決戦の地になると覚悟していた」と語る下司孝之さん（右）。左は1期生の松崎淳子さん（高知市永国寺町の高知県立大学）

の資料はうちには残っておらず、全国的にも珍しい。県民も見られるようにしたい」と話していた。

（村瀬佐保）